

全日本高校・大学ダンスフェスティバル（神戸）受賞作品における
大学生の鑑賞力
高橋和子¹⁾

University students' appreciation for winning performances for
AII JAPAN DANCE FESTIVAL-KOBE
TAKAHASHI Kazuko

要旨

本研究の目的は、全日本高校・大学ダンスフェスティバル神戸（以下、AJDF）の創作ダンスコンクールに出展する作品を5年間、創作ダンス未経験の大学生に生で鑑賞・評価してもらい、その傾向を審査員の評価と比較し大学生の鑑賞力を探ることと、AJDFの8つの評価観点の妥当性について検討することであった。その結果、次のことが明らかになった。

- 1.創作ダンス作品の特徴的な評価観点を大学生もある程度捉えており、鑑賞力があると言えた。
- 2.AJDFの8つの評価観点は、熟練者に限らず評価できるため、妥当な観点であった。
- 3.AJDF受賞作品は、総得点が高く、評価観点も多岐にわたる傾向がみられた。
- 4.「独創的な発想の探求」「クロスカルチャーへの新しい挑戦」に該当する作品講評が少ないことから、これらの観点を重視した作品創作は、難しいと推察された。
- 5.生の作品鑑賞では、「生命力あふれる表現」「斬新な動きの発見」をあげる傾向がみられた。

以上のことから、AJDF受賞作品における大学生の鑑賞力があること、また、評価観点についても妥当であることが認められた。

Abstract

The purpose of the research is to explore the appreciation of university students for AII JAPAN DANCE FESTIVAL-KOBE award-winning works. Another purpose is to examine the validity of the eight evaluation perspectives. University students who had no creative dance experience appreciated the work. They evaluated the works from eight perspectives and compared the trend with the judges' evaluation. As a result, five things became clear.

- (1) University students grasped the characteristic evaluation perspectives of creative dance works.
- (2) Eight evaluation perspectives are appropriate because they can be evaluated not only by experts.
- (3) The award-winning works had a high total score and were highly evaluated.
- (4) There are few reviews for creative and cross-culture.
- (5) Live performances a tendency to discover vitality and novel movements.

From the above, it was confirmed that the university students have the appreciation power in the award-winning works and that the evaluation perspectives are appropriate.

Keywords : creative dance , University students , award-winning works , eight evaluation perspectives, live performances

キーワード : 創作ダンス、大学生、受賞作品、8つの評価観点、生の作品鑑賞

1) 静岡産業大学経営学部
〒438-0043 静岡県磐田市大原1572-1

1) *School of Management, Shizuoka Sangyo University*
1572-1 Owara, Iwata, Shizuoka, 438-0043, Japan.

I. 緒言

1. 研究の背景・目的

「全日本高校・大学ダンスフェスティバル(神戸)(All Japan Dance Festival-KOBE,以下、AJDFと略す)」は、公益社団法人日本女子体育連盟と神戸市・神戸市教育委員会が主催し、1987年に発足した歴史と伝統がある創作ダンスの全国規模のコンクールである。2019年8月上旬には第32回が開催されている。大学創作コンクール部門の参加条件は、出演者は1チーム「5名以上30名以内」であり、作品時間は出入りを含めて「6分以内」である。その条件を守れば、どの大学も予選にエントリーできる。予選審査員は舞踊教育学を専門とする6名であり、審査員の総得点上位16チームが決選に進む。決選審査員は12名であり、審査員の総得点により「高得点順・該当観点別」に8賞、並びに、奨励賞と審査員賞を加えた10賞が選定される^{註1,1)}。入賞大学は、大会最終日の特別プログラムの上演と、NHKで作品が放映される。AJDFのコンクール審査では、1987年の第1回目から、得点評価と創作ダンス作品の特徴的観点(以下、評価得点)を加味して審査されてきた。発足当時の大会会長はお茶の水女子大学名誉教授の松本千代栄(1920～)であり、松本の創作ダンス作品の評価観点を元に、設定された経緯がある。

大学の全国規模の創作ダンスコンクールには、本研究対象のAJDFのほかに、1998年から開催されているアーティスティック・ムーブメント・イン・トヤマ実行委員会が主催する「少人数による創作ダンスコンクール」^{註2,2)}がある。この大会は出演者を5名以下とし、AJDFとの差異を設けている。6名の審査員(映画監督、舞踊家、舞踊評論家、舞踊教育関係者、芸術家、実行委員長等)により、7賞^{註3}が授与される。松本はこの大会にも関与していたことから、総得点と評価観点で審査されている。

その他の創作ダンスやコンテンポラリーダンスのコンクールは、1939年に発足した東京新聞主催の全国舞踊コンクールを筆頭に、埼玉全国舞踊コンクール(1968年～)、あきた

全国舞踊祭モダンダンスコンクール(1982年～)、ヨコハマコンペティション(1986年～)、こうべ全国洋舞コンクール(1988年～)など、すでに30回以上を迎える大会の他、近年ではさらに多くの大会が開催されている^{註4}。これらのコンクール出場の母体は舞踊団が多いが、近年は大学も増加傾向にあり、入賞も果たしている。上述したコンクールの審査は総得点方式が多いが、平岡は「表現力の評価は審査員の主観的な考え方に大きく影響され、審査員が違えば結果も変わる」³⁾と言っている(2019)。

その中で、AJDFは評価観点を加味した稀有な審査方式を採用している。それらの観点は、ダンスの専門的知識や技術を有する審査員のみが把握しているものなのか、それともダンス未経験者である大学生にとっても共通する評価観点になるものなのかを明らかにすることを、研究の目的とした。

II. 研究方法

1. 研究対象・分析方法

Y大学ダンス部のAJDF出展作品を大会前(1週間～2週間前)に生(衣装付き)で大学構内で上演し、それを、創作ダンスがほとんど未経験のY大学教育学部学生に、本研究者の授業(90分×15回のうち約30分、2015～2019年)の一環として作品を鑑賞させた。その際、AJDF大会プログラムに記載される『作品タイトル』と作品内容(40字以内)を提示して鑑賞後、8観点で評価させた(調査用紙は巻末参照)。作品は2015年～2019年に出品した5作品を対象にした(表1)。なお、2015～2018年では、8観点のうち該当する観点を3個まで選択できることとしたが、2019年は授業時間の関係で、1個だけ選択させた。そのため、分析に当たっては、比較を可能にするために割合(%)で表示した。分析方法は、学生の評価の傾向と受賞観点との関連性をみた。また、(公社)日本女子体育連盟編の『女子体育：全日本高校・大学ダンスフェスティバル(神戸)報告特集号』に掲載された審査員講評^{註5}や鑑賞者の自由記述も参考にした。作品の写真は後掲した。

なお、Y大学ダンス部は、大学構内での上演後、鑑賞者の評価や感想も参考にし、さらに特徴を際立たせた作品に仕上げたため、鑑賞時と大会時では作品は変容している。鑑賞者の評価が作品創作に影響を及ぼしているといえる。

2. 倫理的配慮

データ収集に際し、個人情報保護の立場から研究のみに使用することを説明し、論文(写真)掲載にあたっては、対象者と写真家・出版元に承諾を取った。

Ⅲ. 結果と考察

1. AJDF の概要とY大学の受賞歴

研究対象とした5年間の大学コンクール部門における予選大学数と決選入選大学数、並びに、Y大学の受賞の有無と、受賞した場合にはその受賞名を表2に示した。予選の参加大学数は27～33であり、その約半数(15～17校)が決選に進んでおり、その中の10校が毎年受賞校に選出されている。

Y大学は、第1回AJDF(1988)出展作品『世にも激しい議論』で日本女子体育連盟理事長賞を受賞、第15回AJDF(2002)出展作品『コトノハ』で神戸市長賞を受賞した(高

橋2018)⁴⁾。2015年に13年ぶりの受賞を果たし、2016,2017,2018年も連続受賞している。

2015年の『戯：鳥獣戯画から見た世界』は日本女子体育連盟会長賞(生き生きした生命力あふれる表現：写真後掲)、2016年の『あたしにとってのベンチ(あなた)：谷川俊太郎詩集より』は特別賞(主題にふさわしい斬新な動きの発見)、2017年の『空っぽの飼考：社畜が生きる現代を問う』は審査員賞、2018年の『破面』は奨励賞を受賞した。

2019年『昇りゆく翅：J.Fabreが刻む「生」』は決選への入選はしたが、未受賞であった。

2. 鑑賞者による5作品の評価観点の傾向

AJDFに出展する作品を、各年度の学生が生で鑑賞後、8観点で評価した結果を、表3と図1に示した。その結果、20%以上の学生が評価した観点をみると、作品によって相違がみられた。学生と審査員の評価観点が一致しているかを、各作品ごとにみていく。

2015年の『戯：鳥獣戯画から見た世界』は観点「生き生きした生命力あふれる表現」に学生の評価は集中した。審査員も同じ観点への評価が高く、その結果、この作品は「日本女子体育連盟会長賞」を受賞しており、学生と審査員の評価は一致していた。

表1 Y大学の作品名・作品内容・鑑賞者数

『作品名』	作品内容	鑑賞者数
『戯：鳥獣戯画から見た世界』	人生なんて茶番劇。そう教えてくれたのは愉快で奇怪な動物たちでした。	40
『あたしにとってのベンチ：谷川俊太郎詩集より』	当たり前にそこにあるものでもふと気づくとあたしにとって掛け替えのない存在で	42
『空っぽの飼考：社畜が生きる現代を問う』	私たちは飼いやられることのない人間でありたい。	41
『破面』	「面」、それは特定の個人を識別し、思い込みや偏見を生む。「面」に抗い、破れ。	26
『昇りゆく翅：J.Fabreが刻む「生」』	織り重なる虫の死骸。命は燃え尽きてもお輝き、次なる生へと昇り続ける	27

*作品名は以下、次の様に略す。『戯：鳥獣戯画から見た世界』は『戯』、『あたしにとってのベンチ：谷川俊太郎詩集より』は『ベンチ』、『空っぽの飼考：社畜が生きる現代を問う』は『空っぽ』、『昇りゆく翅：J.Fabreが刻む「生」』は『翅』。

表2 AJDFにおける予選校・決選校・Y大学作品名と受賞(2015～2019年)

回	年	予選校	決選校	『作品名』	受賞名：評価の観点
28	2015	32校	16校(50.0%)	『戯』	日本女子体育連盟会長賞：生き生きした生命力あふれる表現
29	2016	27	17(63.0%)	『ベンチ』	特別賞：主題にふさわしい斬新な動きの発見
30	2017	29	15(51.7%)	『空っぽ』	審査員賞：8賞に未該当の作品のうち総得点が高い作品
31	2018	33	16(48.5%)	『破面』	奨励賞：8賞に未該当の作品のうち総得点が高い作品
32	2019	30	16(53.3%)	『翅』	未受賞

*表中、決選校の%は決選に進出した校数を予選校数で割った数値。

2016年の『あたしにとってのベンチ：谷川俊太郎詩集より』は「主題のすぐれた展開・構成」「主題にふさわしい斬新な動きの発見」に学生の評価は二分し、いずれも「主題」に直結した観点であった。審査員の評価は「主題にふさわしい斬新な動きの発見」であり、この作品は「特別賞」を受賞しており、学生と審査員の評価は類似していた。

2017年の『空っぽの飼考：社畜が生きる現代を問う』は、「生き生きした生命力あふれる表現」「主題にふさわしい斬新な動きの発見」「主題にふさわしい演出効果(音楽、衣装、装置、小道具等)の工夫」と、学生の評価は3分し、審査員は8観点への評価は少なかった。その結果、8賞には該当しなかったが、総得点が高かったため審査員賞を受賞した。

2018年の『破面』は「主題にふさわしい斬新な動きの発見」に学生の評価は集中したが、これに該当する特別賞は他大学が受賞したため、総得点が最も高い奨励賞を受賞した。2019年の『昇りゆく翅：J.Fabreが刻む「生」』

の作品内容には「織り重なる虫の死骸。命は燃え尽きてもなお輝き、次なる生へと昇り続ける」が提示されており、「生き生きした生命力あふれる表現」に学生の評価は集中した。審査員の総得点も16位以内ではあったが、8観点への評価は少ないため、未受賞であった。

これらの結果から、AJDFにおける創作ダンスの評価について、次のことが考察できる。

1. 創作ダンスにあまり経験がない学生と専門家である審査員の評価が類似していたことにより、学生の鑑賞力がある程度あったと推察される。
2. AJDFの評価の8観点はダンスの熟練度に限らず、評価できるため、妥当な観点であると言える。
3. AJDFの審査は総得点と評価観点で行われるため、その両方が優れていることが、良い作品として評価される傾向にあった。
4. 作品鑑賞は大会前で未完成のため、「完成

表3 鑑賞者による5作品の評価観点別割合

回	題名	鑑賞者数(述数)	1 完成	2 展開	3 生命	4 独創	5 斬新	6 テクニック	7 クロス	8 演出
28	戯	40(78)	0	14.1	26.9	14.1	3.8	19.2	7.7	14.1
29	ベンチ	42(124)	0	30.6	9.7	0	27.4	17.7	4.0	14.5
30	空っぽ	41(123)	0	0	21.1	12.2	32.5	11.4	2.3	20.3
31	破面	26(61)	1.6	13.1	16.4	18.0	31.1	14.8	4.9	0
32	翅	27(27)	22.2	11.1	48.1	7.4	7.4	3.7	0	0

* 鑑賞者数の括弧内数値は延べ人数。評価観点1～8の数値を合計すると100%になる。

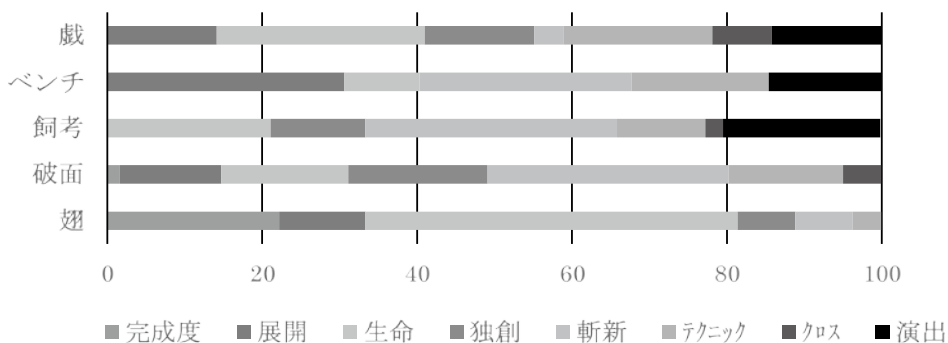


図1 鑑賞者による5作品の評価観点割合

度の高さ」の評価は低い傾向にあった。

3. 審査員講評と鑑賞者の感想の関連性

5 作品の評価の傾向をさらに検討するために、質的研究として審査員の作品講評（下記に斜体で表記）と学生の作品感想の関連性をみた。なお、作品講評者は予選審査員6名の中から、事前に大会実行委員会が決めている。

分析にあたっては、8つの評価観点である「完成度」「主題の展開・構成」「生命力」「独創的な発想」「斬新な動き」「テクニク」「クロスカルチャー」「演出効果の工夫」で行った。審査員の作品講評では、8観点に関連する箇所にアンダーラインを、受賞に関連する箇所には二重線を本研究者が付記した。学生の作品感想分析では、8観点の他に、頻出した「生（なま）の鑑賞」を別項目に立てて分類した。同じ意味合いのものは割愛して表記した。なお、『戯：鳥獣戯画から見た世界』『あたしにとってのベンチ：谷川俊太郎詩集より』の学生感想は取っていないため、3作品のみである。

1) 『戯：鳥獣戯画から見た世界』

審査員評は下記の通りである。これら进行分析すると、「主題の展開・構成」「生命力」「独創的」「テクニク」「クロスカルチャー」「演出」の観点に関連した記述が網羅されている。特に二線重の箇所は「生き生きした生命力あふれる表現」に関連する記述と推察されることから、その賞を受賞できたとも考えられる。

「巻物の中から様々な動物達が見え隠れしながら動き出し、終始飽きさせない展開が繰り広げられた。身体能力の高い独創的な動きの連続と、おどけた表情は観客をユーモア溢れる世界に引き込ませた。衣装、メイク、音楽ともに全てが効果的に用いられており、多彩な仕掛けで驚きを与え続けた作品であった」(成瀬)⁵⁾。

2) 『あたしにとってのベンチ：谷川俊太郎詩集より』

審査員評は「主題の展開・構成」「独創的な発想」「主題にふさわしい斬新な動き」「クロスカルチャー」「演出」の評価観点を網羅しており、特に二線重の箇所は「主題にふさわしい斬新な動きの発見」に関連する記述に該当することから、受賞に繋がったと考えられる。

「様々な人間関係をベンチに座る、立つ、離れる、関わる等の動きで構成したお洒落な作品。優しいベンチの木の温もりと、白色のデコラティブな衣装、音楽、動きで、谷川俊太郎の詩の世界を上手く表現し、観客の心にも「あなた」への気づきを与えてくれた。作品後半部の動きに、もう少し主張があってもよいと思う」(白井)⁶⁾。

3) 『空っぽの飼考：社畜が生きる現代を問う』

審査員評は「主題の展開・構成」「独創的な発想」「主題にふさわしい斬新な動き」「演出」に関連して記述されている。上述した2作品に比べ、評価観点が少ないと言える。

「ネクタイに首を絞められている社畜という若者らしい発想にワクワクしながら観た。スーツを模した衣装も洒落しており、苦しみの中にも切なさ、まじめさゆえの社会の抱える重い問題を6分で語る構成力、表現力も見事。作品後半、苦しみから解放される姿に、若者が夢見る明るい未来を見た」(山田)⁷⁾。

学生の自由記述の感想は、下記の4観点であり、これは審査員評と類似していた。

【主題の展開・構成】「表現が分かりやすくタイトルに沿っている」「タイトルに何か引っかかりを感じた。主題にふさわしいか検討されてもよいのでは?」「社会学を学ぶ者として、“社畜という表現の横行”はいかがなものかと思った。言葉とイメージが一般化されていることを再認識した。これらを感じられたことは表現力があるのだと思った」「知らぬ間に社会や世間に捕らわれている様子を感じた。踊りから必死でもがく姿が見られた」

【生命力】「最後の並んでいるシーンで皆が息

切れしているのはいい」「本気で踊っていることが感じ取れた」「運動量が凄かった」
【斬新な動き】「集団で動くのは見慣れておらず面白かった」「表情や動きが大変変化に富んでいて印象的」「グリグリ動いている人の見た目がいい」
【演出：衣装】「飼うロープとネクタイのダブルミーニングが面白かった」

4) 『破面』

審査員評は「主題の展開・構成」「生命力」「独創的な発想」「斬新な動き」「テクニク」「演出」に関連した記述が網羅されていた。

「無表情な『面』が重なり合う不気味なイメージを彷彿させる冒頭のシーンが印象的。後半にかけて徐々に自分の隠された感情・本質を出そうとする葛藤表現を、確実なテクニクと身体の奥底まで響き渡るビートに合わせて展開し、まとまりある構成で魅せていた。破面という独創的な動きをさらに発展できるとよいと思う」(白井)⁸⁾。

学生の自由記述は、6観点について記述されており、審査員評と類似していた。また、「生の鑑賞」について、迫力や臨場感、身体性（息遣い、視線、表情、ゾクツとする）に関する気づきが多く記述されていた。

【主題の展開・構成】「全体的に主題が良くわかる内容」「題名と演技が一致」「抗い破る感じがとても強く伝わった」「不気味な感じ」「面の破れ方は要検討」「迫力としなやかさがバランスよく構成」「強弱が良かった」「場面ごとの繋がりが滑らかで凄かった」「沢山見たい所があって目が足りなかった」「色々な所での動きがありどこを見たらよいか戸惑った」

【生命力】「大技が多くステージも大きく使い躍動感がすごく感じた」「ダンスがこんなにも汗をかくものだと初めて知った」「怖いけど迫力があって本当に素晴らしかった」「ダンスは素晴らしくカッコよかった」「後半の勢いがユニゾンで落ちたように見えた」

【独創的な発想】「個人を識別するテーマがま

だ出ていない」「無機質なはっきりした面から強い迫力を感じた」

【斬新な動き】「面に迫られる瞬間の動きは息を飲むほど斬新でテーマにピッタリの動き」「二人で影のような動きをする場面」

【テクニク】「動きの統一性、ターンやアクロバット等、個人技のクオリティも高い」
 もっと揃ったらかっこよく見える」

【演出：衣装】「仮面を破る演出がすごい」
 衣装が効果的で世界観に引き込まれた」「激しいところで衣装がひらひらして綺麗」

【生の鑑賞】「すごい迫力。ゾクツとする。呆然」
 とても真近で見えていたのですごい迫力だと実感した」「息遣いまで聞こえたので臨場感があった」「気持ちの入り方が伝わってきた」「一人一人の視線や表情もよい」

5) 『昇りゆく翅：J.Fabre が刻む「生」』

審査員評は「独創的な発想」「主題にふさわしい斬新な動き」「クロスカルチャー」「演出」の評価観点を網羅していたが、曲が「主題の展開・構成」を妨げたという評価であった。

「虫の生態を意識した動きが特徴で個性がはっきりしている作品。衣裳も玉蟲のような美しさでむしろ哀愁を感じさせる。このグループはヤン・ファブルの死生感に触発されてこの作品に取り組んだようだ。実に大学生らしく面白。ただ、使用曲が多すぎて、各シーンが散漫になったように思えて勿体無いと感じた」(坂本)⁹⁾。

学生の自由記述の感想は、6観点について記述されており、特に「生の鑑賞」について、迫力や感動、身体性（息遣い、涙、鳥肌、ゾクゾク）に関する気づきが記述されていた。

【主題の展開・構成】「表現したいことがヒシヒシと伝わる」「死と生の美しく儂い感じが伝わった」「死と生が神格化された感じ」「神秘的なことを表すのは気合がいる事だが、色々なメッセージを伝えられる作品」「見ていて次はどういうテーマかを想像するのが楽しみだった」「構成も様々な事を行っていて

最初から最後まで楽しめた」「前半と後半で緩急があってよかった」「一人一人の位置等も細かく確認していて全体で作品を創るのだと分かった」

【生命力】「一つ一つの動きに生命のエネルギーを感じた」「生命力が踊りから感じられ命の表現が全体の中で変わった気がした」「終盤の生を表現している場面が圧巻で圧倒された」「想像を絶する迫力と凄さに驚いた」「命が尽きてからもなお輝く虫の力強さを感じた」

【独創的な発想】「虫の生死についての作品として斬新なものという印象」

【斬新な動き】「普段使わない動きを行っていることが凄い」「斜めの虫たちの行列場面は、まるで実物を見ているようでゾクゾクした!」「表情も変わっていて一連の物語が良く伝わってきた」

【テクニック】「手や足の先まで綺麗で感動」「一番すごいと思ったのは表情!」「表情や目線を全員で揃えるのは大変だと思うが、全員が揃うととても魅力的」「激しく動きながら合わせて踊る様子がとても美しい」「大会に向けて沢山練習をしてきたと思う」「男性の力強さと女性のしなやかさが綺麗」

【演出】「テーマにあった音楽や道具が用いられ壮大さが生まれていた」

【生の鑑賞】「生で見ることができ感動的」「初めてモダンダンスを見たが迫力と力強さに圧倒された」「後半になるにつれ息があがっていき“生”を感じた」「近くから見ると迫力があって驚いた。ダイナミックな動きの中にしなやかさがありとても綺麗」「凄い。鳥肌

が立った」「見ていて息を飲むほど美しかった」「真剣に立ち向かう素晴らしさ」「ダンスにほとんど触れずに生きてきたが、美しさをゴリゴリ感じる事ができ、涙が止まらなかった」「ダンスを初めて鑑賞してこれが本当のダンスと思い、目を奪われた」「次々にシーンが続いてこの後どんなシーンが来るのかゾクゾクしたが、輝く生が出てきた時に鳥肌が立った」

審査員の作品講評と学生の作品感想の分析を通して、次のことが考察できる。

1. 審査員と学生の作品評価は類似していた。
2. 受賞作品ほど、両者の評価観点が多岐にわたっており、良い作品は多くの評価観点を網羅していたと言える。
3. 学生は「主題の展開・構成」「生の鑑賞」「生命力」「斬新な動き」への記述が多く、これらの評価観点が印象に残ったと考えられる。
4. 特に「生の鑑賞」では、ダンサーの「必死さ・迫力・表情・息遣い」などを、鑑賞者は臨場感を持ちながら、自身のからだの共振(涙、鳥肌、ゾクゾク)を伴って実感していた。

6) 評価観点別傾向

これまで、鑑賞者と審査員の評価観点の傾向を作品ごとにみてきた。次に、学生の評価観点ごとの合計から傾向を探る(図2参照)。これを見ると、作品の主題に関わらず、「生命力」「斬新な動き」に対する評価が高い。

このことは、ダンス熟練者でない学生に

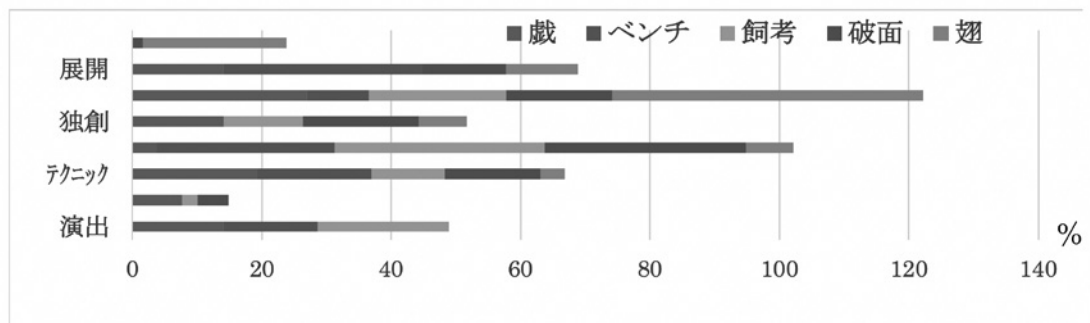


図2 評価観点別傾向

として、身をもって共感しやすい観点であることやY大学の作品の特徴とも考えられる。

その要因にはいくつか考えられる。

1. 生身のからだが必要で真剣に踊っている姿に「生き生きとした生命力」を感じやすい。それは、鑑賞者自身のからだ共鳴し「生の鑑賞」がもたらした影響と考えられる。あるいは、ベンヤミンの言説をかりれば、卓越したパフォーマンスが「いまここ」で展開することによって、鑑賞者自らがプレイや観戦で五感を震わせた過去の記憶と融合されたとも解釈できる(釜崎 2019)。
2. 学生は日常的にスポーツの動きやリズムダンス等を見る機会はあるが、創作ダンス作品鑑賞は初体験の彼らにとって主題を追求した動き自体が「斬新な動き」であったと考えられる。
3. 鑑賞者は、授業の場(日常の見習れた安心する時空間)で、からだはリラックスした中で、身近にいる同級生らへの「応援や期待」をもち作品を見ていた。一方のダンサーは大会を直前に控え受賞を狙う必死さや真剣さを伴い、極限まで全身を使い踊る姿が、目の前で現出する。それらが鑑賞者にとっては「ダンスの生命力」を感じるとともに、日常ではない「晴れの場(祝祭)」「稀有な時空間」としての「斬新さ」に繋がったと推測される。

7) 評価観点別傾向

これまで見てきた評価の傾向を、先行研究のAJDF大学創作コンクール27作品(2015年)の審査員講評の分析結果と比較してみる(高橋 2016)⁶⁾。先行研究は、27作品の審査員講評をテキストマイニング法で分析した結果、頻出語は全て繋がっている特徴がみられる。

改めて共起ネットワークの図を再検討してみると、大きな3つの塊がみられた。①「作品」「テーマ」「面白い」「動き」「素晴らしい」「ダンサー」「高い」「表現」、②「動き」「展開」「連続」「構成」「身体」、③「舞台」「シーン」「印象」「空間」「構成」「衣装」「小道具」「効果」である。

これらの用語の繋がりを重視して、8つの評価観点の用語に当てはめたのが表4である。その結果、「新境地を切り開く独創的な発想の探求」「クロスカルチャーへの新しい挑戦」以外の評価観点の用語と、審査員講評の頻出語は一致していた。高校の作品講評の頻出語においても、同様の傾向がみられた。このことより、この2つの評価観点に該当する作品創作は、難しいと推察される。

表4 審査員作品講評の頻出語と評価観点

頻出語	8つの評価観点
1. 作品	創作作品
2. テーマ・展開・連続・構成	主題の展開・構成
3. 面白い・表現	生命力・表現
4. -	独創的・発想・探求
5. テーマ・面白い・動き・素晴らしい	主題・斬新な動き
6. ダンサー・素晴らしい・高い・見事	動き・テクニーク
7. -	クロスカルチャー
8. 舞台・衣装・小道具・効果	演出効果

IV. 結論

本研究の目的は、AJDFの創作ダンスコンクールに出展する作品を5年間、ほとんど創作ダンス未経験の大学生に生で鑑賞・評価してもらい、その傾向を審査員の評価と比較し大学生の鑑賞力を探ることであった。また、AJDFの評価観点の妥当性についても検討することであった。

その結果、次のことが明らかになった。

1. 創作ダンス作品の特徴的な評価観点を、ダンス未経験の大学生もある程度捉えていたことから、鑑賞力があると言えた。
2. AJDFの8つの評価観点は、熟練者に限らず評価できるため、妥当な観点であった。
3. AJDF受賞作品は、総得点が高く、評価観点も多岐にわたっている傾向がみられた。
4. 2つの評価観点である「新境地を切り開く独創的な発想の探求」「クロスカルチャーへの新しい挑戦」に該当する審査員の作品講評が少ないことから、これらの観点を重視した作品創作は、難しいと推察された。
5. 生の作品鑑賞では、「生き生きとした生命力あふれる表現」「主題にふさわしい斬新な動きの発見」をあげる傾向がみられた。

以上のことから、AJDF受賞作品において

大学生の鑑賞力があることと、8つの評価観点についても妥当であることが認められた。

【今後の課題】 今回は、Y大学の5年間のAJDF 出展作品を大会前にY大学生が生で鑑賞するという条件下での研究であった。受賞時の作品を映像鑑賞しても、同じ評価傾向になるのか、他大学の受賞作品も同様な傾向になるのかについて、さらに研究を進めたい。

【謝辞】 本論稿は平成30-32年度科学研究費補助金研究基盤(C)『健康持続の「からだ気づき」のレジリエンスプログラム開発』の一環であり、ご協力いただいた関係各位に御礼申し上げます。

【註】

1 AJDF 創作コンクール部門の審査(評価)の観点と8賞、奨励賞と審査員賞の観点を示す(第32回大会プログラムより)。審査結果は、出展校の総得点や該当する評価観点の合計数も公表されていない。例えば、総得点が高い作品でも評価観点の合計数が少ないと受賞を逃すこともあるが、実情は知らされていない。(下記2～4は総得点8位以内、5～10は総得点16位以内である。5～8は特別賞)

1. 創作作品の完成度の高さ:総得点第1位(文科大臣賞)
2. 主題のすぐれた展開・構成(NHK賞)
3. 生き生きとした生命力あふれる表現(日本女子体育連盟会長賞)
4. 新境地を切り開く独創的な発想の探求(神戸市長賞)
5. 主題にふさわしい斬新な動きの発見
6. 感性にあふれた優れた動きのテクニク
7. クロスカルチャーへの新しい挑戦
8. 主題にふさわしい演出効果(音楽、衣装、装置、小道具等)の工夫
9. 奨励賞:上記1-8の賞に未該当で総得点が最も高い作品
10. 審査員賞:上記の1-8の賞に未該当で総得点が高い作品

2 大会趣旨は次の通りである(開催要項より)

「若いエネルギーと創造性あふれる華麗な舞台表現をアーティスティック・ムーブメン(ART.M)と名付け、創作ダンス・コンテンポラリーダンスの美しさと迫力ある動きを富山の地から発信し、創作ダンスの発展と出場者の技術と表現力の向上、そして全国の仲間との交流を深める為に、学生による「少人数による創作ダンスコンクール」と、コンクールの優秀作品などの創作ダンスを上演する「エキシビション」を開催するものです」ART.M公式ブログより

3 7賞は次の通りである。

①松本千代栄賞(新鮮な発想と創出力をもつ作品)②富山県知事賞(手堅い出来栄と表現力をもつ作品)③審査員賞(審査員が個性とチャレンジを認めた作品)④北日本新聞社賞(社会、世相を反映した作品)⑤特別賞(複数授与:衣裳デザイン、選曲、演出等に、新たな試みをみせた作品)⑥高岡市長賞(特別に期待すると評価された作品)⑦Uホール賞(学生特有の自由な発想に基づくユニークな表現方法がとりわけ印象深かった作品)。

4 2019年度創作ダンス・コンテンポラリーダンスコンクールのシニア部門(大学生も可)開催の一例を示す。2019.8.25 閲覧

<http://www.you-can-dance.jp/archives/category/contemporary/modern>

- ・第30回JDAダンスコンクール
- ・第22回NBA全国バレエコンクール
- ・第21回東京なかの国際ダンスコンペティション
- ・バレエ・コンクール IN 横浜 2019
- ・第13回埼玉国際創作舞踊コンクール
- ・第12回スリーピング・ビューティ 全日本バレエコンクール
- ・7回ジャパダンダンスコンペティション
- ・第7回座間全国舞踊コンクール
- ・Dance Creation Award

5 AJDF 出展全作品に対して、予選に関わっ

た審査員が一人約10作品を担当して、約150字程度で講評する。

- 6 2014年,2015年 AJDF 創作コンクール部門作品(高校185,大学60)の審査員作品講評をテキストマイニング法で分析した論考である。

引用・参考文献

- 1) 全日本高校・大学ダンスフェスティバル(神戸)実行委員会編.第32回全日本高校・大学ダンスフェスティバル(神戸)プログラム.2019.p4
- 2) ART.M公式ブログ.art-m1998.cocolog-nifty.com/2019.8.25 閲覧
- 3) 平岡信彦.表現力の定量化.体育の科学.Vol.69 No.9 p635
- 4) 高橋和子.高橋和子横浜国立大学教授退職記念誌.高橋和子教授退職記念の宴事務局編.2018
- 5) 成瀬麻美.講評.女子体育.日本女子体育連盟.2015.VOL57.10・11.p59
- 6) 白井麻子.講評.女子体育.日本女子体育連盟.2016.VOL58.10・11.p58
- 7) 山田悠莉.講評.女子体育.日本女子体育連盟.2017.VOL59.10・11.p65
- 8) 白井麻子.講評.女子体育.日本女子体育連盟.2018.VOL60.10・11.p65
- 9) 坂本秀子.講評.女子体育.日本女子体育連盟.2019.VOL61.10・11.p63
- 10) 釜崎太.スポーツのテクノロジー化と身体教育の哲学.体育科教育法.2019.11.pp26-30
- 11) 高橋和子.AJDF神戸作品の傾向.女子体育.日本女子体育連盟.2016.VOL58.10・11.pp108-109
- 12) 高橋和子.創作ダンス発表がレジリエンスに与える影響:全日本高校・大学ダンスフェスティバル神戸受賞校の事例を中心に.静岡産業大学論集.スポーツと人間.第3巻1号.2018.85-96

【巻末資料：Y大学写真】

©All Japan Dance Festival-KOBE executive committee 2015-2019



『空っぽの飼考』2017



『戯：鳥獣戯画から見た世界』2015



『破面』2018



『あたしにとってのベンチ』2016



『昇りゆく翅』2019

【調査用紙】

ダンス鑑賞に関する調査 2019年8月3日

横浜国立大学名誉教授・静岡産業大学教授
高橋和子 takahashi-kazuko-fs@ynu.ac.jp

【調査依頼】

この調査は鑑賞者が、第32回全日本高校・大学ダンスフェスティバル神戸に出展する Y大学モダンダンス部作品『昇りゆく翅：J.Fadre が刻んだ「生」』を、どのように受け止めるのかをみるものです。高橋和子の関連研究以外には使用致しませんので、ご協力お願いします。

【作品解説】

折り重なる虫の死骸。命は燃え尽きてなお輝き、次なる生へと昇り続ける。

【ヤン・ファープル (Jan Fabre, 1958年 -)

出身ベルギー出身の美術家、演出家、振付家。アンリ・ファープルの曾孫。
コガネムシの死骸を用い表面を埋め尽くした彫刻、空間演出で有名¹⁾



【ダンス経験】

(1. 無 2. 1年未満 3. それ以上)

【ふさわしいベスト賞】 ←○を1個つける→ 【印象に残る場面】²⁾

- | | |
|--|-------------------|
| 1. 文部科学大臣賞 | ① 死が色濃く漂う・ドレスオブジェ |
| 2. 主題の優れた展開・構成 | ② 必死に生きる虫達 |
| 3. いきいきとした生命力あふれる表現 | ③ 危機的状況の虫達 |
| 4. 新心境を切開く独創的な発想の探求 | ④ 命燃え尽きる |
| 5. 主題にふさわしい斬新な動き | ⑤ 死を経て更に輝く命の痕跡 |
| 6. 感性にあふれ優れた動きのテクニーク | ⑥ 美しい羽根 |
| 7. クロスカルチャーへの新しい挑戦 | ⑦ エネルギーが満ちていく |
| 8. 主題にふさわしい演出効果
(音楽, 衣装, 装置, 小道具等)の工夫 | ⑧ 次なる生へと昇り続ける |

【感想】 今回受賞すると5年連続全国ベスト10入りを果たします。

感想も含め自由にお書き下さい。Eレ放映8/31日15-16時